

『瘡瘍經驗全書』の鍼灸

上田 善信

日本鍼灸研究会

はじめに

明代は外科が大いに発展し、汪機『外科理例』、薛己『外科發揮』、陳実功『外科正宗』等多くの外科書が著された。一方、鍼灸においても、雷火鍼、神灯照法など、殊に灸法の創意工夫が顕著である。

『瘡瘍經驗全書』12巻（別称『寶氏外科全書』）も明代の外科書の一つで、寶夢麟が明以前の諸医書から輯録したものである。寶夢麟は瘍科の名医である寶時望の孫で、父・寶楠から家学である瘍科を受け継ぎ名を知られた。本書は先行する外科書とは異なり編次も雑然としており、内容は瘡瘍の論治を重視するも、その他、五官器、皮膚疾患、小児雑症、痘瘡、婦人雑症が立項されている。各病症には論、図、薬方がある、その構成は錯雑としている。

鍼灸条文の内容

本書の鍼灸条文は100条あまり見られるが、その6割が灸法を占め、鍼灸并用も2条見られる。鍼灸条文は小刀や鉞鍼を用いて患部から膿血や悪血を取り除く外科的治療であり、その半数が巻一の咽喉部に見える。灸法条文では、他の外科書には見られない病の五蔵伝変に対する施灸が詳述され、隔物灸の使用が特徴的である。また鍼灸禁忌の一種である「逐日人神不宜鍼灸」の記載も見られる。

1. 鍼法条文の内容

小刀（小刀鍼）、靡刀（鉞刀）、鉞鍼、三稜鍼、磁鋒、竹批鍼、蘆刀などを用いる切開手法が主な治療法で、使用する道具にかかわらず、患部を切開して膿血・悪血を取り除くことを目的としている。その効用については、巻九・開刀手法に「凡瘡瘍之起、疼痛固屬於心火、久而陽氣昇上、蒸肉化為膿。……惟以開刀為首、功多獲厚謝」、「以先開刀為首、功多致患者不起衰哉」とある。ただ取除く膿血の量については、巻四・菴蔚散に「以鋒鉞刺瘡四辺多出血」、巻五・診漏濕毒流注に「先用三稜鍼、週廻血出尽」とあるのみで、具体的な記載が見られない。施術部位は概ね患部に限定されるが、巻一の弄舌喉風と喉閉には、他の外科書と同様に、少商穴への施鍼が見られる。

2. 灸法条文の内容

施灸の目的について、巻九・灸瘡瘍法で「惟陰症可灸、鬱氣、濕熱、積毒、借火以拔之、然以火濟水、自有相生之妙」と述べている。灸法を用いる場合は、巻二・腦疽の「初起三日者、剃去髮、以艾炷如豆大者、灸五壯」や巻五・穿襠灸「灸初起便毒臟毒法、用濕蚯蚓糞……」などのように、直接灸・隔物灸にかかわらず初期症状に用いる例が多い。隔物灸に用いる薬剤は大蒜・附子・蚯蚓・塩であるが、巻九・灸瘡瘍法では「惟臟毒、坐馬癰、以蚯蚓泥作餅、代蒜片艾灸之」と使い分けが見られる。艾炷の形状については、巻九・灸瘡瘍法で「艾炷止可如豆大、但面心為陽中之陽、禁灸」と述べている。施灸の壮数は、三壯から百壯まで様々であるが、病状の軽重により加減されている。

結語

本書は先行する医書の輯録であるが、鍼灸条文には巻一・咽喉説の「丹溪云」、巻七・痔漏の「丹溪先生」を除き、引用書の明示が無い。騎竹馬灸法や明・嘉靖年間に始まる艾条灸は見られず、開刀手法や使用する種々の用具（竹批鍼、蘆刀、靡刀）、「逐日人神不宜鍼灸」も他の外科書にはその例を見ない。本書は灸法中心の鍼灸書であり、巻五・附骨疽癰論で「以艾火攻之、万無不愈者」、巻十・明蔵府相入で「鍼有一月之攻、灸有終身之效」と述べて灸治の効用を説いている。明代の外科書としてはかなり異質であるが、外科疾患に対する鍼灸法の多様性を窺うことのできる一書といえる。